



## 馬耳東風

三つ子の魂百までという諺があるが、子供の頃よりのチャンバラ好きは還暦過ぎても変わらない。30歳ちかくなっても「仮面ライダー」を楽しみにしている息子のことを笑えない。週末は大抵「鬼平犯科帳」か「剣客商売」を見る。これらの番組が制作されたのは随分以前のことと思われるが、それでも最後に、「……現在では不適切と思われる表現がありますが、原作者の意向を尊重してそのまま……」云々といった断りが入ることが多い。しかし筆者は番組を見て、「今はこんな言葉は使わないなあ」とか、「不適切な表現だな」とか思ったことはほとんどないように思う。確かに、これは差別用語ですと言われて初めて普段何気なく使っている言葉が差別的表現であったり、差別意識に基づいた言葉であったりすることに気づかされることもあるが、差別用語なるもの「何もそこまで」と思うことの方が多様な気がする。しかし世の中の動きに筆者が取り残されている可能性も否定できない。以前、「ちびくろサンボ」が出版社の自主的な判断で絶版になったとき、当然とは思えず呆れ返ったからである。

過日、新聞で障害の「害」の字を「碍」にしようと言う動きがあることを知った。本来「障害」は、「障礙」と標記されていたが、略字の「碍」になり、さらに戦後の常用漢字制限で音が同じ「害」になったという。害という字は公害とか害虫という差別的イメージがあり、障害者自身の存在と社会的役割が否定される危惧があるのに対して、碍は「さまたげる」という意味で障害者の行く手が拒まれているということを表すため、本来の碍に戻そうというのである。なるほどもっともな意見であり全く異論はない。さらにその記事には英語でも handicap という言葉を使わないようにしようという動きがあると、理由は、乞食を意味する cap in hand を連想さ

せるからだであった。cap in hand が乞食を意味するとは知らなかった筆者は、手元の辞書で引いてみた。すると「脱帽して、へりくだって、こびへつらって」とあり、〈主に願い事をするときの表現〉という注釈のある辞書もあったが、乞食とは結びつかない。そこでさらに調べてみると、ある idiom 辞典に、「恥ずかしいと感じさせるような方法でお金や助けを求めること」との説明があり、例文として I had to go cap in hand to my parents again to ask for some money. とあった。つまり乞食というのは言い過ぎであるが、〈卑屈にお金をねだったり、願いごとをする時の表現〉であるということが判明した。

一方 handicap の語源は、諸説あるようであるが、私が信じているのは以下のような説である。近代競馬発祥の地英国で、紳士達が自分の愛馬どうしを競わせていたころ、強い馬が大抵勝ってしまうのでレースとして面白味に欠ける。そうだと背負わせる斤量に差をつけようということになった。しかし、自分の馬に軽い斤量を割り当てられるのを潔しとしない英国紳士が多く、この考えはすんなりとは受け入れられなかった。そこで競い合う馬の実力に見合う斤量を決めて紙に書きこれを帽子の中に入れて馬主に引かせ、引き当てた紙に書かれた斤量を背負わせることにした。これだと強い馬が軽い斤量を引き、弱い馬が重くなることもある反面、うまくマッチするとおもしろいレースとなる。このようなレースのことを hand in cap race と呼んだというのが handicap の語源だというのである。差別をなくそうという取り組みにはもちろん大賛成だが、こんな興味深い由来を持つ言葉をそう簡単になくさないで欲しいと願うのは競馬好きの筆者ばかりではあるまい。障害の害を本来の碍に戻すとは本質的に異なり、handicap が cap in hand を連想させるなんて言葉遊びとしか思えない。

(久)